

記憶を失くしても、君への愛は消せない

第1話：監視と誘惑	2
第2話：偽りの関係	15
第3話：真実の告白	25
第4話：婚約と破棄	34
第5話：記憶の代償（分岐エンド）	46

第1話：監視と誘惑

十月の冷たい風が、古い墓石の間を吹き抜けていく。響は墓地の入口にある鉄柵の陰に身を潜め、双眼鏡を覗き込んでいた。レンズの向こうに映るのは、一人の男———慧という名の墓地管理人だ。

組織から与えられた任務は単純明快だった。この男を監視し、彼が隠し持つという重要情報を入手すること。だが、三日前から始めた監視で、響が見たものは拍子抜けするほど平凡な日常だけだった。

「……また花の手入れか」

響は舌打ちした。慧は今日も黙々と墓石を磨き、枯れた花を取り替え、雑草を抜いている。その真面目すぎる仕事ぶりに、響は苛立ちを覚えた。

———こんな退屈な男が、本当に国家機密レベルの情報を持っているのか？

自暴自棄な性分が頭をもたげる。どうせこの任務も、前回のように失敗に終わるのだろう。組織での自分の立場は、もはや風前の灯火だった。

「クソが……」

独り言を呟いた瞬間、足元の枯れ枝を踏んでしまう。パキリという音が、静寂な墓地に響いた。

「誰かいるんですか？」

慧の声が聞こえる。響は慌てて身を隠そうとしたが、もう遅かった。慧はまっすぐこちらに向かって歩いてくる。

「あの……大丈夫ですか？」

鉄柵の向こうから、慧の顔が覗き込んできた。思っていたより若い。写真で見るより、ずっと

響は自分の思考を振り払った。任務中に何を考えているんだ。

「あ、ああ……ちょっと、墓参りに来たんだけど、道に迷って」

咄嗟についた嘘だった。慧は優しく微笑む。

「それは大変でしたね。どちらのお墓をお探しですか？」

「……実は、初めて来たもので。祖父の墓があるはずなんです」

響は適当に話を作りながら、慧の表情を観察した。人の良さそうな顔をしているが、これも演技かもしれない。

「お名前を教えていただければ、墓地の記録を調べますよ」

「響……藤原響です」

本名を名乗るのは危険だったが、偽名では後々面倒になる。慧は少し考えてから言った。

「藤原家のお墓なら、確か東側の区画にありますね。ご案内しましょう」

慧は鉄柵の鍵を開け、響を中に招き入れた。二人並んで歩き始める。慧の横顔を盗み見ると、真っ直ぐ前を向いて歩いている。警戒心というものが全く感じられない。

「お仕事は？」

響が探りを入れる。

「ここの管理人をしています。もう五年になりますかね」

「五年も？ 若いのに珍しい仕事を」

「死者と向き合う仕事が、性に合っているんです」

その言葉に、響は違和感を覚えた。死者と向き合う——まるで生者を避けているような言い方だ。

東側の区画に着くと、慧は一つの墓石を指さした。確かに「藤原家之墓」

と刻まれている。響は驚いた。まさか本当に藤原家の墓があるとは。

「偶然ですね」

慧が言った。「ちょうど昨日、この墓石を掃除したんです」

響は墓石に手を合わせるふりをしながら、頭を整理した。これは偶然なのか、それとも

「あの、もしよかったら」

慧の声で我に返る。

「今日は彼岸でもないのに、墓参りに来られたということは、何か特別な日なんですか？」

鋭い質問だった。響は一瞬言葉に詰まったが、すぐに答えを見つけた。

「祖父の命日なんです。でも、今まで一度も来たことがなくて」

「そうでしたか……」

慧は何か言いかけて、やめた。代わりに墓石の前にしゃがみ込み、新しい花を供えはじめた。その手つきは慣れたもので、丁寧だった。

「どうして墓地の管理人を？」

響は核心に近づこうとした。

「……昔、大切な人を亡くしまして」

慧の声が少し翳る。

「その人の墓を守りたくて、この仕事を始めたんです。でも、一つの墓だけを特別扱いはいできないから、全部の墓を大切にしよう」と

その横顔に、嘘は感じられなかった。響は混乱した。この男は一体何者なのか。

花を供え終わると、慧は立ち上がって響を見た。その視線がまっすぐで、響は思わず目をそらしそうになった。

「もし、また来ることがあれば、声をかけてください。お茶でも出しますから」

「……ありがとう」

響は短く礼を言って、その場を立ち去ろうとした。だが、数歩歩いたところで慧に呼び止められる。

「あの、お名前を聞いてもいいですか？ 私は慧……小田慧といいます」

振り返ると、慧が少し照れたような笑顔を浮かべていた。

「響です。藤原響」

「響さん……いい名前ですね」

その言葉に、響は動揺した。褒められたことへの戸惑いではない。慧の声に込められた、何か特別な響きを感じたからだ。

墓地を出て、響は振り返らずに歩き続けた。だが、背中に慧の視線を感じていた。角を曲がってから、響はようやく立ち止まって深呼吸をした。

———なんだ、この感覚は。

任務として接触に成功したことへの満足感ではない。もっと別の、説明のつかない感情が胸の内で渦巻いていた。

夜になって、響は再び墓地に忍び込んだ。慧の住む管理人小屋の明かりはまだついている。窓からそっと中を覗くと、慧は机に向かって何か書き物をしていた。

その横顔を見ていると、昼間の出来事が蘇る。慧の優しい笑顔、真っ直ぐな視線、そして

「響さん」

突然名前を呼ばれ、響は飛び上がりそうになった。いつの間にか、慧が小屋の外に立っている。

「やっぱり、あなただったんですね」

慧は静かに言った。驚くでもなく、怒るでもなく、ただ事実を確認するように。

「……何のことだ」

「三日前から、誰かに見られている気がしていました」

響は舌打ちした。バれていたのか。

「警察に通報しないのか？」

「なぜ私を見ているのか、まず理由を聞きたい」

慧が一步近づく。月明かりに照らされた顔は、昼間よりも大人びて見えた。

「ストーカーみたいな真似をして、すまない」

響は観念して謝った。だが、本当の理由は言えない。

「実は、君に興味があったんだ」

半分本当で、半分嘘の言葉。慧は首を傾げる。

「僕に？ なぜ？」

「……分からない。ただ、君を見ていたくなった」

自分でも驚くような言葉が口をついて出た。慧の目が見開かれる。

「それは……」

慧が言いかけた時、響の携帯が振動した。組織からの定時連絡だ。響は舌打ちして、電話を無視した。

「今の電話……」

「気にしないでくれ。それより、警察に通報しないでほしい。もう二度と勝手に見たりしない」

響は踵を返そうとした。だが、腕を掴まれる。慧の手は思ったより大きく、温かかった。

「待って。まだ話がしたい」

「……なぜ？」

「分からない。でも、あなたといると、何か懐かしい感じがして」

慧の言葉に、響は振り返った。二人の距離が近い。慧の息遣いが聞こえる。

「君は、俺のことを知っているのか？」

「いいえ。でも……」

慧が言葉を探している間に、響は衝動的に動いた。慧の顔に手を伸ばし、頬に触れる。慧は驚いたように息を呑んだが、逃げなかった。

「君は優しすぎる」

響が呟く。「知らない男にこんなに無防備で」

「あなたは……悪い人じゃない」

「なぜそう思う？」

「目を見れば分かります」

慧の真っ直ぐな視線に、響は言葉を失った。こんなにも純粹に人を信じる者がいるなんて。

気がつくと、二人の顔が近づいていた。慧の吐息が響の唇に触れる。あと少しで————

「やめた方がいい」

響が囁く。「俺に関わるな」

「でも……」

「君のためだ」

響は慧から離れ、今度こそ背を向けた。だが、数歩歩いたところで、また慧の声が聞こえた。

「明日も来てくれますか？」

振り返ると、慧が月明かりの下で立っている。その姿が、なぜか切なく見えた。

「……分からない」

「待っています」

慧の言葉を背に、響は墓地を後にした。

アパートに戻った響は、ベッドに倒れ込んだ。頭の中で、慧の顔が離れない。あの真っ直ぐな瞳、温かい手、そして————

携帯が再び鳴る。今度は無視できない。組織の上司からだ。

「進捗はどうだ」

「接触に成功しました。明日から本格的に」

「期待している。今度こそ失敗は許されないぞ」

電話が切れた後、響は天井を見つめた。任務と、慧への感情。その間で引き裂かれそうになる。

———俺は一体、何をしているんだ。

自暴自棄な自分と、知的好奇心に突き動かされる自分。その両方が、慧という存在に惹かれて
いる。だが、これは任務だ。感情を持つことは許されない。

響は目を閉じた。明日、また慧に会う。その時、自分がどんな選択をするか、まだ分からな
かった。

翌日、響は約束通り墓地を訪れた。慧は管理人小屋の前で待っていた。

「来てくれたんですね」

慧の笑顔を見て、響の胸が痛む。この笑顔を裏切ることになるのか。

「昨日は悪かった」

「謝らないでください。むしろ、僕の方が」

慧が近づいてくる。昨日より一歩、また一歩と距離が縮まる。

「実は、僕も昨日から、あなたのことばかり考えていて」

慧の告白に、響は息を呑んだ。これは想定外だった。

「それは……」

「変ですよ。会ったばかりなのに」

慧が苦笑する。その表情があまりにも無防備で、響は思わず手を伸ばしていた。慧の頬に触
れ、親指で頬骨をなぞる。

「君は、人を疑うことを知らないのか」

「疑う理由がありますか？」

慧の問いに、響は答えられなかった。あるのだ。大いにある。だが、それを言えるはずもな
い。

「僕、実は」

慧が口を開く。「ずっと一人でした。この墓地で、死者とだけ向き合って。でも、あなたに会っ
て、久しぶりに生きている実感がして」

慧の手が、響の手に重なる。その温もりが、響の心を揺さぶる。

「君は……」

響が何か言いかけた時、慧が不意に顔を近づけてきた。そして———

唇が触れた。一瞬のことだった。慧はすぐに離れ、真っ赤になって俯く。

「ご、ごめんなさい。つい……」

慧の慌てる姿を見て、響の中で何かが決壊した。慧の顎に手をかけ、顔を上げさせる。そして今度は響から唇を重ねた。

最初は軽く触れるだけだったが、次第に深くなっていく。慧の唇は柔らかく、微かに震えていた。舌先で唇をなぞると、慧が小さく息を漏らす。

「んっ……」

その声を聞いて、響の理性が完全に飛んだ。慧を墓石の陰に押し付け、より深くキスをする。慧の手が響のシャツを掴む。拒絶ではなく、もっと求めるように。

舌を割り入れると、慧が驚いたように身を硬くした。だが、すぐに力を抜き、響を受け入れる。舌と舌が絡み合い、唾液が混じり合う。慧の膝が笑い始めていた。

「は……あ……」

唇を離すと、慧が熱い吐息を漏らした。とろんとした目で響を見上げる。その表情があまりにもエロティックで、響は下半身に血が集まるのを感じた。

「君……初めてか？」

「……そんなこと、ないです」

慧が真っ赤になって否定するが、その初心な反応が答えになっていた。響は慧の首筋に顔を埋め、耳元で囁く。

「嘘をつくのが下手だな」

「……っ」

耳に息を吹きかけると、慧がビクッと震えた。敏感なようだ。響は舌先で耳朶を舐める。

「ひゃ……だ、だめ……」

慧が抵抗しようとするが、腰に力が入っていない。響は慧を支えながら、首筋にキスの雨を降らせる。鎖骨の窪みに舌を這わせると、慧が甘い声を上げた。

「あっ……んん……」

その声を聞いて、響の興奮が高まる。慧のシャツのボタンを一つ外し、鎖骨から胸元にかけて舌を滑らせる。慧の肌は思った以上に白く、きめ細かった。

「響……さん……」

慧が響の名前を呼ぶ。その声に混じる熱と戸惑いが、響の加虐心を刺激した。

響は慧のシャツをさらにはだけさせ、薄い胸板に手を滑らせた。指先が乳首に触れると、慧が大きく震える。

「そこ……ダメ……」

「敏感なんだな」

響は意地悪く笑いながら、乳首を指で摘まむ。軽く転がすと、慧が必死に声を殺そうとした。

「んーっ……ふう……」

「声、出していいよ。ここには誰もいない」

「で、でも……」

慧の躊躇いを無視して、響は片方の乳首を口に含んだ。舌で転がし、軽く歯を立てる。

「ひぁあっ！」

慧が大きな声を上げ、慌てて口を塞いだ。その反応が可愛くて、響はさらに激しく乳首を責めた。吸ったり、舐めたり、甘噛みしたり。もう片方は指で執拗に弄る。

「あっ……ああっ……やあ……」

慧の腰がガクガクと震え始めた。ズボンの前が盛り上がっているのが分かる。響は太ももを慧の股間に押し当てた。

「っ！！」

慧が目を見開く。硬くなった慧のモノが、響の太ももに押し付けられる。響が少し脚を動かすと、慧が悲鳴のような声を上げた。

「だめっ……そんな……あぁっ」

「もう、こんなになってる」

響が囁きながら、手を慧の股間に滑らせる。ズボンの上から形をなぞると、慧が腰を引こうとした。だが、背後は墓石。逃げ場はない。

「お、大きい……」

触ってみて、響は驚いた。見た目の優しさからは想像できないほど、慧のモノは立派だった。ズボンの中で窮屈そうにしている。

「これ、苦しいだろ？」

響がベルトを外そうとすると、慧が慌てて手を掴んだ。

「ま、待って……ここで、そんな……」

「じゃあ、場所を変えるか」

響は慧の手を引いて、管理人小屋へ向かった。慧は抵抗するでもなく、ただ顔を真っ赤にしている。

小屋の中は思ったより広かった。奥にベッドがあり、きちんと整えられている。響は慧をベッドに座らせ、自分も隣に腰を下ろした。

「……本当にいいのか？」

響が最後の確認をする。慧は俯いたまま、小さく頷いた。

「響さんとなら……いいです」

その言葉に、響の胸が痛む。騙していることへの罪悪感。だが、もう止められない。

響は慧を仰向けに押し倒し、再びキスをした。今度はゆっくりと、丁寧に。慧も少しずつ慣れてきたのか、積極的に舌を絡めてくる。

シャツを完全に脱がせると、慧の上半身が露わになった。細身だが、墓石を運ぶ仕事のせいか、意外と筋肉質だった。響は慧の体を舐めるように見つめる。

「み、見ないで……」

「綺麗だ」

響の言葉に、慧がさらに赤くなる。響は慧の体に覆いかぶさり、首筋から胸、腹へと舌を這わせていく。へその周りを舐めると、慧が大きく仰け反った。

「んああっ……くすぐったい……」

「可愛い反応だな」

響はいよいよズボンのベルトを外し、ゆっくりとファスナーを下ろす。下着が現れ、その中で慧のモノが大きく主張していた。

「すごいな……パンツが破れそうだ」

「い、言わないで……」

慧が顔を両手で覆う。響は下着の上から、慧のモノの輪郭をなぞった。先端部分は既に濡れており、下着に染みを作っている。

「もう、こんなに濡らして」

「し、仕方ないじゃないですか……初めてだから……」

慧の言葉に、響は優しく微笑んだ。そして下着を下ろし、慧のモノを解放する。

想像以上に大きく、太かった。亀頭は赤黒く充血し、鈴口から透明な液体が溢れている。血管が浮き出た幹は、ビクビクと脈打っていた。

「立派なモノを持ってるんだな」

「や、やだ……恥ずかしい……」

慧が隠そうとするが、響がその手を止める。そして、慧のモノを手にとった。

「あっ！」

慧が大きく震える。響はゆっくりと手を動かし始めた。根本から亀頭に向かって、しごくように。

「ふあっ……あっ……きもち……いい……」

慧が素直に感じている声を出す。その反応に、響も興奮してくる。手の動きを速め、時々亀頭を握りしめる。

「ひゃあっ！　だめっ……そこ……敏感……」

「ここか？」

響は亀頭の裏筋を指で擦った。慧の腰が跳ね上がる。

「ああああっ！　だめだめだめっ！」

「すごい反応だな」

響は執拗に裏筋を責めながら、もう片方の手で睾丸を優しく揉む。慧は完全に理性を失い、腰を振り始めた。

「はぁっ……はぁっ……もう……だめ……」

「イキそう？」

「わ、わかんない……でも……なんか……」

慧の呼吸が荒くなり、モノがさらに大きく膨張する。響は手の動きを最速にした。ジュブジュブと卑猥な水音が響く。

「あっあっあっ……くる……なにか……」

「いいよ、イって」

響が耳元で囁いた瞬間、慧が大きく仰け反った。

「ああああああっ！！」

慧のモノから、白濁した液体が勢いよく噴き出した。一度、二度、三度……ドピュドピュと音を立てて精液が飛び散る。慧の腹から胸にかけて、白い液体がべっとりとかかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

慧が荒い息を吐きながら、放心状態になる。響は優しく慧のモノをしごき、最後の一滴まで搾り出した。

「すごい量だな」

「……恥ずかしい」

慧が腕で顔を隠す。響はティッシュで慧の体を拭きながら、優しくキスをした。

「気持ちよかった？」

「……うん」

小さく頷く慧が愛おしくて、響は強く抱きしめた。

———俺は、とんでもないことをしているんじゃないか。

任務を忘れ、ただ慧を求めている自分がある。だが、もう後戻りはできない。この先に待つ結末が、どんなものであろうとも。

窓の外では、夕日が墓石を赤く染めていた。二人の関係が、これからどう変わっていくのか。響にはまだ、分からなかった。

第2話：偽りの関係

あの日から一週間が過ぎた。響は毎日のように墓地を訪れ、慧と時間を過ごしていた。表向きは恋人のように振る舞いながら、響は慧の日常に入り込み、情報を探っていた。

だが、成果は芳しくなかった。慧の生活は驚くほど単純で、隠し事をしているようには見えない。管理人小屋を何度も探したが、怪しいものは何一つ見つからなかった。

「響さん、今日も来てくれたんですね」

慧が嬉しそうに微笑む。その笑顔を見るたび、響の胸がチクリと痛む。

「ああ……約束したから」

響は曖昧に答えた。本当は組織から「もっと深い関係になって情報を引き出せ」

と命令されたからだ。だが、それを慧に言えるはずもない。

「今日は特別な場所を見せたいんです」

慧が響の手を取る。その手は相変わらず温かい。響は一瞬躊躇したが、されるがままについていった。

慧が案内したのは、墓地の奥にある小さな教会だった。古びた石造りの建物で、長い間使われていないように見える。

「ここは昔、葬儀に使われていた礼拝堂です。今はもう誰も来ません」

慧が重い扉を開ける。中は薄暗く、埃っぽい空気が漂っていた。だが、不思議と神聖な雰囲気が残っている。

「なぜここに？」

「実は……」

慧が振り返る。「ここに、見せたいものがあるんです」

慧は祭壇の裏へ回り、隠し扉を開けた。響は驚いた。こんな仕掛けがあるなんて。

「これは……」

「懺悔室です。昔の神父が使っていたそうです」

狭い空間に、向かい合って座れる椅子が二つ。その間を格子が仕切っている。

「どうしてこんな場所を？」

「響さんに、話したいことがあって」

慧が格子の向こう側に座る。響も仕方なく反対側に腰を下ろした。薄暗い中、格子越しに慧の輪郭がぼんやりと見える。

「実は僕……」

慧が口を開く。「響さんに隠していることがあります」

響の背筋が伸びた。ついに核心に近づけるのか。

「何を隠してるんだ？」

「僕の過去です」

慧の声が震えている。響は息を殺して続きを待った。

「五年前まで、僕は別の仕事をしていました。とある研究機関で……データ管理をしていたんです」

研究機関。組織の情報と一致する。響の鼓動が早まった。

「なぜ辞めたんだ？」

「……恋人を亡くしたからです」

意外な答えだった。慧が続ける。

「彼は同じ研究所の研究員でした。優秀で、優しくて……でも、事故で死んでしまった」

「事故？」

「研究中の爆発事故です。彼は巻き込まれて……」

慧の声が詰まる。格子越しでも、涙を堪えているのが分かった。

「それで君は研究所を辞めて、ここで墓守を」